

外来釣り文化としてのフライフィッシングの研究

A study of Fly fishing as an exotic fishing culture

1K03A133-9 田邊 望

主査 内田 直 先生 副査 石井 昌幸 先生

序章

釣りはもともと、食料としての魚を捕る漁の一方法として発達してきた。縄文時代の遺跡からも骨でできた釣り鉤が発見されている。しかし、時代が進む中で、より効果的なさまざまな漁法が考案され、釣りは漁から遊びへと変化する。遊びとしての釣りであっても、釣り上げる魚は、食べる対象として考えられている。魚を釣り上げ、食べるという一連の過程が遊びとしての釣りである。これは、漁としての釣りからの名残である。そんな遊びとしての釣りのなかから、ゲームフィッシングへと分化するものが現れる。代法的なものが、フライフィッシングと、ルアーフィッシングである。ともに、ヨーロッパで生まれた釣りである。ゲームフィッシングでは、その過程の中から、釣り上げた魚を食べるという要素がなくなり、魚とのやり取りを楽しむという要素のみが発展していった。

そんな、ゲームフィッシングの中でもこの論文ではフライフィッシングを取り上げたい。500年以上の歴史を持ち、現在に至るフライフィッシングは独自の文化を内包した釣りである。この釣りは発展していく過程において日本にも伝わった。そして、現在では、日本の淡水域における釣りのひとつとして定着している。

現在、日本のフライフィッシングは、変革期を迎えている。釣り場環境の改革が進んでいるのである。そんな変化を推し進めている背後には、フライフィッシングが持ち込んだ釣り文化が影響を与えている可能性がある。140年の時を経て、外来釣り文化として日本に定着したフライフィッシングを、イギリスにおける釣り文化とともにその歴史を眺め、フライフィッシングが日本の川釣りに与えている影響について考察する。

第1章 フライフィッシングの概要と歴史

この章では、フライフィッシングの概要と歴史を示す。第1節でフライフィッシングについて概観したあと、第2節で魅力の分析をする。第3章では、フライフィッシングのタックルについて解説する。第4章では技術的な面でのフライフィッシングの歴史を追う。

第2章 イギリスの釣り文化

この章では、飯田操著「釣りといギリス人」をもとに、フライフィッシングの母国であるイギリスの釣り文化を示す。第1節の16世紀から始まり、第5節の20世紀ま

で歴史を追って示していく。第6章では、イギリスの釣り文化の変遷から、何がイギリスの釣り文化の本質なのかを考察する。

第3章 フライフィッシングの日本への流入

この章では、日本へのフライフィッシングの流入、定着の歴史を追う。第1節で、日光・中禅寺湖におけるフライフィッシングの歴史を示す。中禅寺湖は日本フライフィッシング発祥の地とよばれているが、その歴史にはとても興味深いものがあつた。東京アングリングエンドカンツリー倶楽部という日本の中枢に位置する人物たちをメンバーとした組織ができ、その者たちの社交の場としてフライフィッシングが行われていたのである。第2節では、戦後、フライフィッシングが大衆に広まっていく過程を追った。

第4章 日本の釣り環境の変化

第1節では、現在、日本の河川で、釣り場環境の変化が起きていることを述べる。河川の管理体制と釣り人のニーズとの間にギャップが生じ、無視できないものにまでなったのである。各地で、釣り人からの働きかけが、漁業協同組合や行政を動かし、新しい取り組みが始まっている。第2節では、キャッチアンドリリースについて、第3節では天然河川利用型管理釣り場、第4節ではサケの調査捕獲について述べる。この3つはフライフィッシングとも関係が深く、これからの川釣りを考えたときポイントとなってくる事柄である。

第5章 フライフィッシングが持ち込んだ釣り文化、その可能性

河川において、釣り場環境の変化がおき始めているなかで、川釣り全体が、魚を獲るという行為から、魚と楽しむという方向に変わりつつある。そんな川釣り文化の変化を、第1節では、近年溪流での餌釣りに新しく登場してきたゼロ釣法を使って示す。魚とのスリリングなやり取りを楽しんだあとはリリースしようという考えは、フライフィッシングの文化に通じるところがある。第2節では、まとめとして、フライフィッシングに内包されるイギリスの釣り文化が、これからの川釣りに対して持つ可能性について述べる。第3節では、エピローグとしてこれからの川釣りに対する期待を述べた。課題は十分あるが、それを乗り越えるパッションがあれば、そこにはチャンスが転がっている。